

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

岸田吟香・矢津昌永・米倉二郎の中国地誌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小島, 泰雄, Kojima, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/383

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



岸田吟香・矢津昌永・米倉二郎の中国地誌

小 島 泰 雄

1. 地誌にとっての近代

地域はいかに書かれてきたのであろうか。近代はそれをいかに組み替えていったのであろうか。小論はこれらの問いに対して、19世紀後半から20世紀前半に日本人によって書かれた中国地誌を取り上げて検討するものである。

地誌の近代的な変容を考える作業に先立って、まず近代以前に書かれた伝統的な地誌について整理しておこう。日本の地理学史では、風土記が地誌の原点に置かれてきた。¹⁾ 8世紀前半に地方の国司から朝廷に奉呈された地域の報告書が、総称として風土記と呼ばれている。それは律令制が整備されてゆく中で、中央集権王政が施政の参考とするために編まれたと考えられる。²⁾ また風土記の原形を残すとされる播磨国風土記を読み進めると、地域伝承の記載を通して、天皇の下に地方を位置づけなおす意図に気づく。その意味で風土記は律令制を支える役割をも担っていた。

地域を書くことと地域を意味づけてゆくことが関連していることは、風土記が参考にしたとされる、中国の地誌にも表れている。中国の地誌の歴史は古い。後漢（1世紀）の『漢書』地理志が後世の範となる完成度を有し、宋代（10世紀）の『太平寰宇記』においてすでに記載は定式化されたとされる。また宋代

1) 石田龍次郎『日本における近代地理学の成立』大明堂、1984年、9-11頁。

2) 初期の風土記については、同時期に編纂された日本書紀の編纂資料とするために集められたとする説もある。植垣節也・橋本雅之編『風土記を学ぶ人のために』世界思想社、2001年、340頁。

以降には「方志」と呼ばれる地方誌が急速にその量を増やしてゆく。³⁾

方志の主力は中央集権的な王朝支配の末端を担ってきた県の地誌である。県の統治は中央から派遣される知事と在地の地域エリートの協働により実現されていた。外来者である知事にとって方志が施政の参考として重要であったことは言うまでもないが、在来の地域エリートにも自らの県を地誌として記述することは重要な課題と意識されていた。ある方志の序文には、地誌が作られることで地域はより生き生きとしたものとなると記されている。⁴⁾ また地域エリートは自らの宗族の先人を地誌に書くことを大きな誉れとしていた。中国における地誌は地域の賞揚という役割を担っていた。

伝統的地誌が、自らの地域を施政の参考あるいは地域の賞揚のために記述することを目的としていたのに対して、近代的地誌には異なる役割が求められることとなった。

近代の啓蒙家である福沢諭吉は『世界国尽』の中で、つぎのように述べている。⁵⁾ 「土地の風俗人情も処変われば品かわるその様々を知らざるは人のひとたる甲斐もなし」と。明治維新という大きな社会変革の背景には、被植民地化への恐怖というべき、グローバル化への否応のない対応があった。外国地誌はその中で立ち現れてくる。近代的地誌では、世界すなわち他者としての地域を記載することが、時代の要請として、その主たる目的となっていった。この視角から近代地誌を見通すと、そこには青地林宗の『輿地誌略』に代表される江戸蘭学による翻訳世界地誌からの連続が浮かび上がる。⁶⁾

近代的地誌は近代地理学にとっても中心的課題となった。西洋におけるグローバル化への対応という社会的側面と、科学の制度化という学術的側面から、近

3) 周迅《中国的地方志》商務印書館、1998年、203頁。

4) “従前路過夔州的人、問起有没有志書、一説没有、都对夔州很藐視、把夔州看作“陋邦”。現在志書修成了、夔州從此有光彩了。”《正徳夔州府志》。ただし周迅(1998)前掲注3(106頁)の引用による。

5) 福沢諭吉『世界国尽』、『福澤諭吉著作集』第2巻所収、慶応義塾大学出版会、2002年、61-160頁。初出は明治二年(1869)。

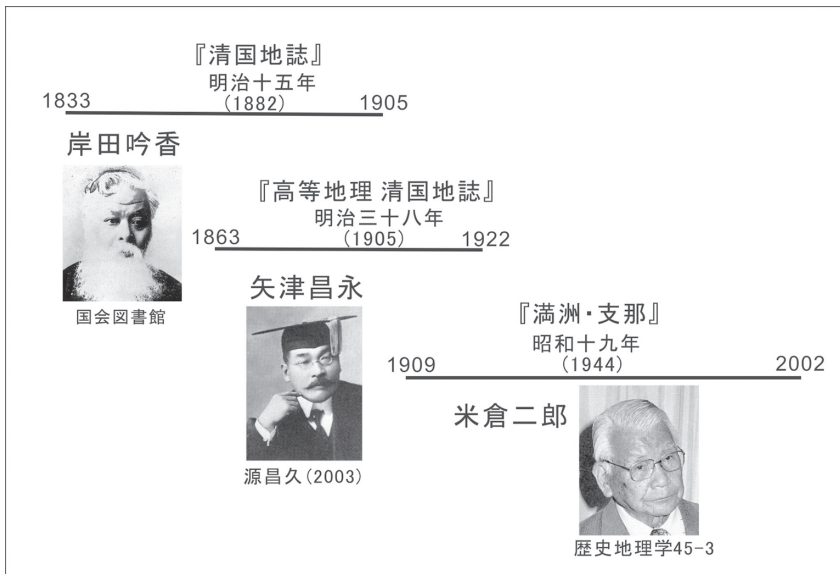
6) 鮎沢信太郎『鎖国時代の世界地理学』原書房、1980年、363頁。初出は1943年。

代地理学はその対象を地域の考察に収斂させていった。地域への環境論的な接近から始まり、20世紀半ばには地域の科学的記述こそ地理学の役割とみなされるに至った。

小論は近代的地誌がいかに形成されていったのかについて、中国地誌の展開を通して考えてゆく。具体的記載を通して検討するために、明治初期の新聞人である岸田吟香、傑出した地理教育者である矢津昌永、そしてアカデミー地理学の薫陶をうけた米倉二郎の3人の著作を取り上げることとした。

2. 三者の略歴

19世紀後半から20世紀前半までに書かれた中国地誌は多数にのぼる。そのなかで、岸田吟香・矢津昌永・米倉二郎の3人の中国地誌はどのような位置を占めるのだろうか。ここでは3人の略歴の紹介を通して、この問いに答えてゆきたい。



第1図 岸田・矢津・米倉と中国地誌

① 岸田吟香

岸田吟香は幕末から明治前期に活躍した新聞記者であり、かつ点眼薬販売の実業家でもある。天保四年（1833）に美作の旧家に生まれた岸田は、まず津山で、のちに江戸へ出て学問を修めた。江戸では昌平黌や藤森天山の下で学び、漢学に対する深い理解を得た。ヘボンの和英辞典編纂を手伝うことになったのも、その多彩な経験とともに、この学識があったからである。幕末にはジョセフ・ヒコとともに日本で初めての新聞を発行し、明治に入ると東京日日新聞に主筆として入社し、その文筆により部数を伸ばすことに貢献した。とくに台湾出兵にあたっては従軍記者となり、その記事は人気を集めたとされる。のちに点眼薬「精錡水」の販売に成功し、楽善堂薬舗を開く。後半生は中国への関心を高め、中国各地に楽善堂の支店を開設したほか、荒尾精の日清貿易研究所設立（明治二十三年）や近衛篤磨の東亜同文会設立（明治三十一年）に協力している。明治三十八年（1905）に東京で死去した。72年の生涯であった。

岸田が初めて中国の地に足を踏み入れたのは慶応二年（1866年）である。半年余り上海に滞在して、ヘボンが和英辞典を印刷するのに立ち会っている。2回目の渡清は慶応四年で、江戸と横浜の航路に就航させる蒸気船を買うためであった。3回目は明治十三年、点眼薬の精錡水の販売拡大のため、上海に支店を開いている。このときに中国から書き送り日本の新聞に掲載された中国についての記事は観察と洞察に富んだものである⁷⁾。この頃から日中交流に積極的に携わるようになり、興亜会に参加し、遊清人懇親会を設立している。『清国地誌』はこうした中国への関心の高まりの中、明治十五年に出版されている。その後、明治十五年、十六年、十八年、十九年、二十一年と、毎年のように中国へ通い、また多くの時間を彼の地で過ごしている。この間に楽善堂の支店を中国各地に開いていった。その中には荒尾精の諜報活動の拠点となった漢口支

7) 幕末明治の激動期を生きた岸田吟香の多彩な経歴は、短くまとめることを許さないひろがりをもつ。杉浦正『岸田吟香—資料から見たその一生』汲古書院、1996年、412頁。

8) 同上書、267-280頁。

店も含まれている。

岸田吟香の『清国地誌』は、明治十四年五月に出版届けが出され、翌十五年(1882)五月に出版されている。全3巻で、第一巻が65丁、第二巻が89丁、そして第三巻が96丁である。⁹⁾本書は明治に入って初めての本格的な中国地誌と考えられる。本書に先立って出版されていた中国地誌としては、沖正修『支那地誌略 巻之一』(敬業堂、明治七年)、高田義甫『清国地理小誌 上巻』(明治十三年)が確認される。¹⁰⁾それぞれ40丁、20丁という小冊子であり、記述も岸田の本に比してはるかに簡略なものである。

ただし『清国地誌』は岸田が自ら著述したものではない。明治十年に近藤圭造が編集した『輿地誌略 東半球之部』のうち、中国に関わる部分を抽出し、一書として再版したものである。冒頭の数行を加筆した以外は、版もまったく同じものである。書名を変更し、「近藤圭造纂輯」を「岸田吟香纂輯」に変えただけといってもよい。つまり岸田吟香は出版者としてこの『清国地誌』に携わったことになる。¹²⁾

② 矢津昌永

矢津昌永はアカデミー地理学が確立される以前に地理教育に大きな貢献をした人物である。¹³⁾矢津は文久三年(1863)に肥後の武家に生まれた。熊本で私塾

9) 岸田吟香『清国地誌』三冊、明治十五年(1882)。国立国会図書館ホームページの近代ライブラリー所載。

10) 国立国会図書館の蔵書検索による。

11) 近藤圭造編『輿地誌略』六冊、阪上半七、明治十年(1877)。なお近藤は明治九年に『兵要万国地理小誌』を編んでおり、そこでも中国についての簡略な記述を行っている。

12) 岸田は晩年に清国地誌の執筆に取り組んでいたが未刊に終わったとされる。本書の出版前後から中国と深く関わるようになった岸田が、本書の徹底的な書き換えをめざしていたと考えるのが自然である。杉浦正(1996)、前掲注7、292頁。

13) 矢津昌永について、最も徹底した学史的検討を加えているのが源昌久である。本節の記述も基本的に源の研究成果による。源昌久『近代日本における地理学の一潮流』学文社、2003年、283頁。

に通い、のち熊本師範学校に入学し、地理と英語を学んでいる。19歳の時、熊本県で小学教師となり、24歳で福井県の師範学校へ転じ、地理教育に従事することとなった。27歳の時に熊本の第五高等学校へ移ったが、この異動に前後して『日本地文学』（明治二十二年初版）を出版した。本書は版を重ね、ひろく読まれた日本の自然地理についての教科書である。ドイツ人による日本自然地理を参照しながらも、その翻訳にとどまることなく、气象台や水路部などの資料・報告書を収集して作成したものであることが明らかにされている。¹⁴⁾ 32歳で東京の高等師範学校に異動し、研究科で教育学を学んだり、陸軍教授を兼任したりしながら、48歳まで勤めている。その後は大正七年まで早稲田大学で地理学関係の講義を担当し、大正十一年（1922）に61歳で死去した。

『高等地理 清国地誌』は明治三十八年（1905）に出版されたもので¹⁵⁾ 高等師範学校時代の矢津が多数出版した中等学校向けの教科書・参考書の1冊である。明治三十年代前後のこの時期に矢津が出版したものには、『中学 日本地誌』（明治二十八年）、『新日本地誌』（明治二十八年）、『中学 万国地誌』（明治二十九年）、『中学 地文学』（明治三十年）、『新編中学地理 日本誌』（明治三十一年）、『新編中学地理 外国誌』（明治三十二年）、『中地文学』（明治三十二年）、『中地理学』（明治三十二年）、『新撰外国地理』（明治三十四年）、『日本政治地理』（明治三十四年）、『新撰日本地理』（明治三十五年）、『世界地理学』（明治三十五年）、『地理学小品』（明治三十五年）、『新撰中地文学』（明治三十六年）、『高等地理 欧羅巴洲之部』（明治三十六）、『高等地理 阿非利加洲部』（明治三十六年）、『高等地理 亜細亞洲』（明治三十九年）、『大日本地理集成 全』（明治三十九年）、『世界物産地誌』（明治三十九年）、『高等地理 南亞米利加洲』（明治四十一年）が挙げられるが、¹⁶⁾ それらは日本地誌、外国地誌、地文学という教育課程に沿ったものである。また『高等地理 清国地誌』と同じ高等地理シリー

14) 源昌久「矢津昌永著『日本地文学』に関する一考察」同上書、135-158頁。

15) 矢津昌永『高等地理 清国地誌』丸善、明治三十八年（1905）、390頁。

16) 源昌久（2003）、前掲注13、63-97頁。

ズには、ヨーロッパ・アジア・アフリカ・南アメリカ・韓国の地誌がある。

矢津が中国に行ったのは、明治三十四年に華北、三十八年に満洲、大正六年に山東、大正十年に台湾の4回とされる。¹⁷⁾『高等地理 清国地誌』は一定の現地観察の経験に立ちながら、他の教科書と同様に、中国についての当時の基本的了解を整理したものと考えられる。

③ 米倉二郎

米倉二郎はアカデミー地理学の形成を担った世代を引き継いで、地理学の発展に貢献した地理学者である。¹⁸⁾米倉は明治四十二年（1909）に佐賀県で小学教師夫妻の子として生まれた。¹⁹⁾三養基中学では小川琢治門下の伏見義夫に地理を学び、校友会誌に「支那統一」という文章を書くなど中国への関心が高かった。昭和三年に佐賀高校理科甲類から京都大学文学部史学科に進んだ。大学では人文地理学を専攻し、小川琢治、石橋五郎、喜田貞吉、小牧実繁、小野鐵二に学んでいる。卒業論文は「筑後川下流平野の開発」という歴史自然地理学的な地誌をまとめている。昭和六年に卒業して古賀正己の下で農学部教務嘱託として研究を継続し、翌年、文学部の助手となる。この頃には条里を古代の農村計画として捉える斬新な研究を展開していたが、初めての海外旅行として、小牧の引率による教室旅行に参加し、満洲事変直後の中国北部を巡検している。また日中戦争開戦前夜の昭和十一年には、台湾から福建、上海、江南地方を単身でまわっている。昭和十二年に和歌山高等商業学校に転出し、本格的に高等教育に携わることとなった。昭和十四年には北京から山西、蒙古高原、山東を調査している。昭和十六年には満洲に出かけ、満洲族の開拓集落を調査し、黒河から朝鮮北部を通して帰国している。この年に初めての著書となる『東亜地政学

17) 同上書、130-131頁。

18) 米倉の地理学研究については岡田俊裕の学史研究が詳細かつ全面的なものとなっている。岡田俊裕『日本地理学史論—個人史的研究』古今書院、2000年、288頁。

19) 出生から戦後までの略歴については、米倉自らの「回顧」による。『米倉二郎先生年譜・業績・思い出』（米倉二郎先生退官記念事業会編・発行、1973年）4-18頁。

序説』を出版し、東洋地理学の政治地理学的伝統から「大東亜共栄圏」の可能性を検討している。昭和十七年に山口高等商業学校に転任しているが、その山口高商には東亜経済研究所があり、前任者は中国地理学者の西山栄三であった。こうして中国への関心と実践を深めるなかで、世界政治地理体系第二巻の『満洲・支那』²⁰⁾を米倉は執筆した。昭和十八年に南方派遣軍総司令部調査班に加わって従軍し、シンガポール、マニラ、サイゴンで調査活動に携わり、とくにインドシナ半島の調査を行っている。終戦はサイゴンで迎えた。戦後、公職追放により故郷に戻り、佐賀において研究活動を継続した。1951年に追放が解除され、翌年、広島大学文学部の教授に迎えられた。その後、1973年の退官まで研究と教育に務めた。広島では集落地理学、歴史地理学を主要な領域として研究を進め、主著となる『東亜の集落』(1960)を出版している。また数次にわたるインド調査を組織した。2002年に93歳で逝去した。

『満洲・支那』は、日中戦争下という特別な時代において、多彩な研究を精力的に進めていた三十代半ばの米倉が著した中国地誌である。当時、米倉の関心は大東亜共栄圏の枠組に中国を位置づけることにあり、その中国研究は歴史地理学と地政学の両面からの接近となっていた。歴史地理学的接近が小川琢治の継承であるとするれば、地政学は小牧實繁・室賀信夫との交わりから生み出されたものとみなすことができよう。本書はアカデミー地理学のただ中において著されたものである。同時に本書は「時流に流された不明を謝するのみ」²¹⁾という自己批判が示す通り、総力戦という時代の要請に答えた結果、生まれたものでもある。

3. 岸田の『清国地誌』

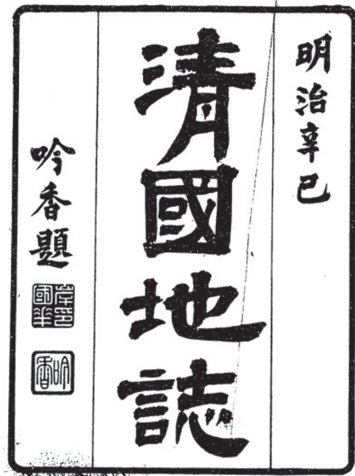
『清国地誌』の出版に際して、岸田は次の広告を東京日日新聞(明治十五年

20) 米倉二郎『満洲・支那』白揚社、昭和十九年(1944)、395頁。

21) 米倉二郎(2008)、前掲注19、206頁。

六月十六日)に載せている。²²⁾

此書ハ支那ノ輿地図説ナリ、清国十八省ノ高山、大川、名所、古跡ハ勿論、ソノ季候、物産、風俗、人情及ビ草木、鳥獸等ニ至ルマテ一々之ヲ録シ、或ハ歴代古今ノ沿革ヲ説キ、一省ゴトニ初メニ銅版ヲ以テ細密ナル地図ヲ入レテ、其地理、山川ノ方角ヲ明ニシ、又処々ニ各区ノ真景、各地ノ異俗等ノ画图ヲ挿ンデ文章ノ足ラザル処ヲ補ヒ、且ツ読者ヲシテ目ヲ樂マシム、



第2図 岸田吟香『清国地誌』

ここで岸田が強調するのは、本書が中国についての総合的な地誌となっていることである。山川や気候、動植物といった自然に関する記事から、名勝旧跡や経済、歴史といった人文的なものまでを取り上げたことが紹介されている。この宣伝文がどこまで内実をとまなうかは、下で検証することとして、まず本書の特徴であり、かつ一般読者を強く意識したことの証左でもある、図版の多用について考えてみたい。

地誌において地図が重要な役割を持つことは言うまでもない。本書には精密な表現が可能である銅版印刷を用い、複数の省にわたる広域をカバーした地方図が所々に載せられている。それらは経緯線が用いられた正確なもので、皇輿全覧図や乾隆十三排図の系統の測量地図によったものと考えられる。同様の正確な地図としては、上海について西を上 Huangpu 江に沿って県城と租界が左右に並ぶ構成を採る、19世紀半ばに欧米人が作成した都市図がある。

22) 杉原正 (1996)、前掲注7、292頁。

図版は、地方図と都市図だけでなく、北京の円明園や杭州の西湖などを描いた中国風の名所図や、香港や天津など開港都市の西洋風の景観図、駅舎や妓館などの風俗図、さらに記述と関わりなく配される歴史地図など、多種多様なものが掲載されている。

こうした図版の多用は、明治初期にひろく読まれたとされる内田正雄が編訳した世界地誌にも共通して認められる傾向である。²³⁾さらに江戸期を代表する中国地誌である『唐土名勝図会』からの連続を考えるならば、当時の日本における地誌に共有された様式とすることができよう。

つづいて本書の内容の検討に移るが、まず編集がいかに行われたかについて、本書が翻刻したところの近藤圭造『輿地誌略』の記載から考えてゆこう。²⁴⁾

本篇拠ル所ノ書、英国ゴールドスミス氏ミッチェルコルネル氏ガヨット氏ノ地理書、近クハ、スウィントン氏ノ地理書カッケンボス氏ノ歴史、リップンゴット氏及ビ、ビートン氏地理字典等、其他各種ノ地誌、及ビ歴史遊記等ヨリ抄出スルモノ尠ナカラズ、特ニ欧洲ノ如キハ、各国ノ地理專書アリ、英文ニ訳セシモノニ就テ、抄録スルコト、最モ多シ、支那ノ如キハ、洋書記スル所、沿海各処ノミ、内部ノ山川城邑、甚ダ詳カナラズ、故ニ内部ハ清一統志、清会典、宸垣記略等、傍ラ名山勝概記、輿地奇勝等ニ拠テ採録シ、沿海地及ビ開港城ノ地誌ハ、悉ク前件引拠スル所ノ地理書ニ拠リ、及ビ、ロルドエルシンス氏ノ支那紀行又ペルリ氏支那日本紀行等ヨリ抄出ス

近藤の『輿地誌略』は、全球誌略、東半球誌略、西半球誌略の3部構成で、中国はこの東半球誌略に含まれている。上は序文の執筆に際して参照した文献に言及した部分で、洋書を涉猟し、それらを抄訳したことが述べられている。

23) 内田正雄編訳『輿地誌略』全四編十二巻、明治四年～十三年。

24) 近藤圭造(1877)、前掲注11、巻一、1-2丁。

しかし中国については、洋書の記載が沿海部に限られていることから、内陸については大清一統志などの中国の地誌と名勝記によることが書かれている。

発行者としての岸田と編集者としての近藤が目指した中国地誌は、本書においてどこまで実現していたのであろうか。実際の記述レベルで検討を進めることとする。

まず全体の構成であるが、巻一は、清国輿地総説（1-13丁）、京師順天府及直隸省（13-36）、山東省（36-52）、山西省（52-65）からなる。巻二は、河南省（1-18）、江蘇省（18-41）、安徽省（41-52）、江西省（52-64）、福建省（65-75）、浙江省（75-89）からなる。そして巻三は、湖北省（1-15）、湖南省（15-23）、陝西省（23-35）、甘肅省（35-43）、四川省（43-56）、広東省（56-67）、広西省（67-74）、雲南省（74-84）、貴州省（84-89）からなり、末尾に通史（89-96）が付されている。総説と通史を前後に配し、18の省ごとに記載が行われている。

記述は中国の全国地誌に添ったものとなっている。華北の歴史的な中心都市である保定の記事にそれを確認してゆこう。²⁵⁾

保定府治ハ、京師ノ西南三百五十里、清苑県ニアリ、直隸省城ノ在ル所、二州十五県ヲ領ス、（中略）此地、禹貢冀州ノ域、戦国趙ニ属ス、秦、上谷、鉅鹿ノ二郡ハ涿郡、信都、中山三郡ノ地、（中略）域内大河ノ如キ、安州城北ニ於テ、曹河徐河石橋河、一畝泉、滋河、沙河、鴉兒河、唐河ノ諸水ヲ合流シ、始テ易水ト名クルアリ、（中略）完県ノ馬耳山ハ、西三十里ニアリ、二峰霄漠ニ挿ム、馬耳ニ似タルヲ以テ名ク、（後略）

まず北京からの距離と位置、行政領域の編成とその沿革すなわち歴史的変遷

25) 岸田吟香（1882）、前掲注9、巻一、24-25丁。

が述べられている。つづいて領域内部について、河川と山地の構成を記している。

この保定の記事が代表するように、本書は沿革と山川を2つの軸として府レベルの記述が進められている。それは地域的な網羅性を確保する一方で、個別の記載内容を削ぎ落としてゆくことになる。2軸を外れる記載、たとえば経済や社会についての人文地理的な記述はごく限られたものとなる。

それでは本書の記載と、中国における全国地誌とはどのような関係にあるのであろうか。本書も参照したとされる19世紀前半に編まれた官製の『大清一統志』²⁶⁾における保定府の記事を確認しておこう。

その構成は、巻一が行政沿革表に始まり、分野、建置沿革、形勢、風俗、城池、学校、戸口、田賦と続き、巻二は山川、巻三は古跡、関隘、巻四は津梁、堤堰、陵墓、祠廟、寺觀、名宦、巻五は人物、巻六は列女、仙釈、土産からなっている。したがって『清国地誌』は、ここから沿革と山川を抜き出し、それを軸に抄訳していることとなる。また記述レベルでも、『大清一統志』の建置沿革には「禹貢冀州之域、周属幽州、春秋戦国属趙、秦属上谷郡」とあり、山川には「馬耳山、在完県西三十里、(中略)、双峰並峙、形如馬耳」の記載があり、上に引用した部分との関連を確認することができる。

本書の記載は保定の記事に示される原則から外れることは少ない。松江府に属する上海の記事は、そのわずかな例外の一つである。²⁷⁾

此地、三十年前、英人ト約シテ上海県ニ、外交貿易場ヲ開ク、上海ノ居民、既ニ五十余万口ニ及ビ、西洋各国、競テ入港シ、洋館石室、港中ニ相接ス、繁華頗ル江南ニ於テ、巨指ヲ屈ス、此港、税関ヲ江海関ト名ク、昨光緒二年ノ収税、三百二十五万両余ヲ清算ス、輸出貨ノ多キニ憑ルト雖トモ、輸入鴉片ノ重税モ亦尠ナカラス、市中烟館ノ設ケアリ、妓ヲシテ客ヲ引キ、鴉片ヲ吸ハシム、嗚呼国人千苦ノ膏滴、タダ一吸半縷ノ烟ニ換フ、亦怪シ

26) 《嘉慶重修一統志》卷十二～十七。

27) 岸田吟香(1882)、前掲注9、卷二、26-28丁。

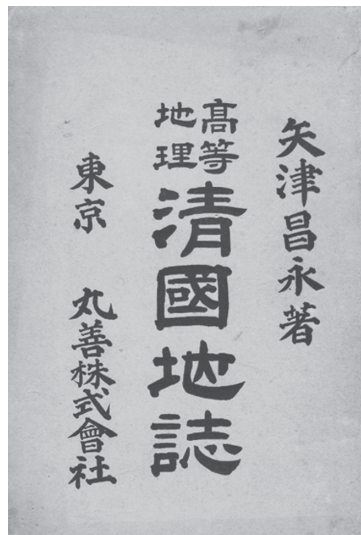
カラスヤ、近ク我が製、人力車大ニ行ハル、幾ント全国ニ遍キノ勢ヒアリ

保定の記事との違いは明白である。ただし光緒二年（1876）という執筆時点と接近した時期の税関統計が引かれることや、日本起源の人力車が流行していることに関心が払われる点には、この上海の記事が必ずしも洋書の翻訳のみからなると言うことはできないであろう。また後段のアヘン流行に対する否定的見方は、内田正雄の『輿地志略』や福沢諭吉の『世界国尽』といった同時代の世界地誌にも共有されているもので、日本の中国観が変化しつつあることを示している。

4. 矢津の『高等地理清国地誌』

岸田吟香の『清国地誌』にきざした中国観の近代的展開は、本書においては植民地主義的な色彩を帯びて現れてくる。矢津は序文に次のように記す。

清国ノ開発ハ今ヤ世界列国ノ共同的事業タルノ傾向アリ。久シク支那宝庫ノ鍵鑰ヲ預リシ支那人ハ、其レ自身ノ力ヲ以テ宝庫ノ堅扉ヲ開クノ秘術ヲ知ラズ、惘然自失ノ状態ニアリ。是ニ於テ他ノ列国ハ各々起チテ自ラ開扉ノ功ヲ奏セント競フモノノ如シ。（中略）
翻ツテ我国ト清国トノ関係ヲ観ルニ、之ヲ地理上ノ距離ヨリスレバ、僅ニ一葦帶水ヲ隔テテ所謂唇齒輔車ノ関係ヲ有シ、之ヲ歴史上ヨリスレバ一千有余年來彼我来往絶タズ、比較的風俗習慣



第3図 矢津昌永『高等地理清国地誌』

ノ相似タルモノアリ。此ノ地理上親密ノ関係ヲ有シ、此ノ歴史上深厚ノ関係ヲ有スル隣邦ノ事、豈ニ他邦人ノ蹂躪ヲノミ許サンヤ。

宝庫としての中国は、欧米列強による植民地分割の競争の対象になっており、地理と歴史において深い関係を有する日本が、隣国として列強の蹂躪を許してよいのか、と問うている。列強の分割競争への参加か、それとも日中の相互協力による列強への抵抗か、当時の論争の中に本書を置き直して読むことも必要であろう。

さて、序文には本書の編集についても記されている。

今此書記スル所其大要ニ過ギズト雖モ、地理学上ノ鉄案ニ依リテ支那ヲ科学的ニ解説セルハ、聊カ本書ノ特色ナリト信ズル所ナリ。又人文地理上ニ関スル事項ハ、多年支那研究ニ志ス教諭渡邊信治氏ノ補草スル所ニ係ル。

人文地理に関する記載については、渡邊信治の執筆に基づいていることが断られているが、ここで注目すべきは「地理学上ノ鉄案」「科学的ニ解説」という、執筆原則に係わる言及である。本書が科学としての地理学に基づいて書かれていることへの自負とみなされるが、実際にはいかなる記述となったのだろうか。

まず全体の構成から見てゆこう。目次の大項目を追っていくと、清国の位置・面積・行政区画から説き起こされ、地勢、地形、水誌、海岸、海流、気候、天産物と続く自然地理に係わる記事が全体の2割ほどを占めている。そして住民、交通、生業、政治という人文地理に関する記事が5割ほどの紙幅を費やして掲載される。後段は地方誌として18省と満洲・蒙古・西藏・新疆についての個別の記載が全体の3割ほどで書かれている。本書は自然・人文・地誌という地理学の大分類に添った体裁を持っている。

個別の記述においても岸田との距離は明らかで、それは近代科学の定着を物語

るものとなっている。中国北部に分布する黄土についての記述を引いておこう。²⁸⁾

黄土の成生に就ては種々の説ありリヒトホーフエン氏に従へば中央亜細亜地方に風化せる土砂の蒙古風の飛颺によりて散布せられたるものなりとし、又スケッチリー (Skertchly) 氏に従へば氷河の運搬したる漂土が氷河中絶時代 (Interglacial Period) に大気的作用によりて再び運搬せられて堆積したるものなりと云ひ、 (後略)

当時、リヒトホーフエン等、西洋の研究者の間では、黄土の成因について風成説と水成説が論争となっていたが、それを簡明に展望する記述がなされている。これは矢津の自然地理研究者としての力量を示すと同時に、本書が単に地域を羅列的に紹介する次元のものではないことを教える。

本書が翻訳地理学を越えて、矢津によって総合された地誌である証左は、産業 (生業) の1項目として日清貿易をたて、明治二十七年以来の貿易額の変遷表が付されていることをその一例として取り上げるだけで十分であろう。また本書の成立以前に、矢津は中国を一度、訪問しているが、地方誌直隸省の北京の項には紫禁城参観記が載せられている。²⁹⁾ 現地観察も本書の成立に寄与しているのである。

なお後段の地方誌の記載は簡略で、府レベルの記事は位置と物産、風俗といったものに限られ、沿革は全く触れられていない。本書は体裁については中国地誌の伝統からほぼ切り離されたものとなっている。図版が大きく減少したことも、読者層の違いと地理学の進展を背景としているとみなされる。

さて冒頭に述べた中国観であるが、全体を通読すると、矢津は本書において中国に対して客観的な立場を維持していることがわかる。むしろ列強の分割競争にさらされた中国が、潜在的な力を有していることが処々に記されている。

28) 矢津昌永 (1905)、前掲注15、23-24頁。

29) 同上書、265-270頁。

たとえば当時の主産業である養蚕に関する次の記事はその代表である。³⁰⁾

江蘇、浙江の如く蚕業隆盛にして、其の区域広大なる地方に於ても、本邦の如く特に蚕室を設けて專業的の大養蚕をなすものなく、各地皆な中産以下の農民の副業たるに過ぎず、是を以て其法は簡略にして粗雑に流れ、品質劣等にして絲量の少なる蓋し亦止を得ざるなり、若し断然改良を施さば一変して世界の蚕業国を圧倒するに至らん、現時に於ても既に幾分か改良發達の必要を認め、当業者は翕然として之に向はんとし蚕絲の輸出額は輸出総額の四割以上を占め、其の輸出は年々増加の傾あり

日本が養蚕の産業化を進めてきたのに対して、在来の農家副業にとどまる中国の養蚕業の問題点を指摘するが、同時にその潜在力と開発がある程度進展していることを評価している。

日清戦争から10年、日露戦争のただなかに書き上げられた本書には、序文から想像されるような植民地主義的な記述はほとんど認められなかった。それが学問の世俗からの独立を大切にしたいためか、あるいは矢津の中国に対する態度によるものであるか、現時点では軽々に断じることはできないが、本書が中国地誌として高い完成度を持つに至ったこととの連関は想定してよいであろう。アカデミー地理学が起動する明治末年を前にして、本書の形成にいかなる同時代的な地理学の進展が寄与したのかについては、日本の近代地理学史において解明すべき課題と言えよう。³¹⁾

30) 同上書、190-194頁。

31) 石田龍次郎は、明治大正期の地理学を、中国方志の様式が地誌において命脈を保ったこと、自然地理学が人文地理学に先行していたことを指摘した上で、科学研究としての展開が遅れていたことを指摘する。石田龍次郎 (1984)、前掲注1、267-299頁。また、源昌久の書誌学的研究は、矢津を含めて個人レベルで当時の地理学の進展を明らかにしたものである。源昌久 (2003)、前掲注13。

5. 米倉の『満洲・支那』

上に考えた岸田と矢津の中国地誌が20年という期間を隔てていたのに対して、本書は矢津の出版から40年を隔てて世に問われたものである。この間にアカデミー地理学は体制を確立し、その中で米倉は生まれ、本書が生まれた。まず序文に綴られた著者の言葉から検討を始めることとしよう。

大陸に関しては既に通俗的概説や翻訳の時代は過ぎて、今や明確なる立場よりする個々の地域的特殊研究を深化し、それを基礎とする新なる展望が与へらるべき秋である。本書は満洲と支那と

に就いて大東亜新秩序発展の過程とその将来の方向とを日本地政学の観点から概述したものである。その際東洋地理学の伝統を受継いで古文献を参照し務めて歴史地理的考察を行ひ各地域のもつ本質を明かにすると共に内外先学の地域的研究又貧しいながらも我自身の満支に於ける幾つかの個別研究を土台とした。

米倉が二つの原則をもって本書を執筆していたことがわかる。その一つは学術的な水準を満たす地誌であること、そしてもう一つは地政学の観点から満洲と中国を展望することである。

まず学術水準については、中国地誌がすでに通俗的な概説や翻訳に基づいた記述では不十分となり、個別の地域的な研究に基づいた成果でなければならないとしている。さらに具体的な方法として、歴史地理学的に地域形成を明らか



第4図 米倉二郎『満洲・支那』

にすること、既往の地域的な研究に加えて自らの現地調査に基づく研究を活用することが述べられている。ここにいう歴史地理学的な接近は、岡田俊裕が指摘するように小川琢治の中国研究を継承する面はあるが、同時に大学の卒論³²⁾から継続してきた集落地理学と歴史地理学の研究の延長上に本書があることも意味している。

もう一つの地政学的観点とは、「大東亜新秩序」と称される日本による植民地経営の文脈において、地政学的に満洲と中国を論じてゆくことである。米倉は地政学について、本書が属するシリーズ世界地理政治体系の広告文において「私は之等支那古来の方志を新しい視角から見直して、独逸ゲオポリティクの直訳ならざる、真の地政学書を書きたいと思ふ」と述べ、中国地理学の伝統である沿革地理を援用する歴史地理学的な地政学を目指すとしている。

この2つの原則は具体的な記述に如何に反映されたのであろうか。まず全体の構成を概観しておこう。総序の「新秩序の展開」に続く第一部満洲国は、満洲史の地政学的概観、新秩序の長子—満洲国、満洲国土の自然的構造、満洲国国民の構成、満洲国の産業立地、満洲の開拓の6章からなる。第二部支那は、支那の自然、漢民族生活圏の拡大と分裂、西力の侵略と支那の変貌、北支那とその開発、中支那とその振興、南支那—南方圏の一環、西南支那と蔣政権、西北支那と回教徒及共産軍の8章からなり、総結の「新秩序の地政学」で終わっている。

目次からも判るように、東亜新秩序にすでに組み込まれていた満洲が国家として論じられるのに対して、中国本土は開発の対象として論じられており、記述の重心も大きく異なっている。まず満洲の記載から考えてゆこう。³³⁾

五百万移民の計画は将来満洲人口五千万の一割を占むる計算である。しかし五百万の開拓民を現在の如く分散的に漢族社会内に散布したのでは、嘗

32) 岡田俊裕 (2000)、前掲注18、205-213頁。

33) 米倉二郎 (1944)、前掲注20、151-152頁。

て満洲族が漢族社会に吸収され尽した轍を踏まないとは云い難い。斯くては満洲国創建の使命に叛くのみならず、遂には大東亜共栄圏の大計を画餅に帰さしむるに至るであろう。日本民族が飽くまでその主体性指導権を掌握し諸族を率いて皇民的満洲国民を創生し得んが為には、この五百万の開拓民は全体的計画のもとに集团的連続的に配置されねばならぬ。

満洲事变以降に日本人が入植した地点を検討し、その分散している現状を明らかにした上で、松花江下流から大興安嶺東麓に至る開拓民地帯を設定し、ここに引いたような理由から、集中的入植を進めることを提言している³⁴⁾。さらにこの前後では、現地調査と先行研究にもとづいて、開拓村のミクロな集落立地について、治安と用水の観点から集村形態をとるべきであり、北海道農法を改良した農業経営が望ましいとする。

ここには本書が目指した学術的な水準、すなわち実証研究に裏付けられた記述が確認されるが、同時に、不均等な民族観に基づく指導—従属の構図の中に満洲を位置づける作業としての、地政学的考察も見出されるのである。

本書の二面性、すなわち実証的かつ地政学的な記述は、中国本土の記事にも同様に認められる。華北農村の実態について述べた部分では、中国社会学者の李景漢等が行った調査の報告書である『定県社会概況調査』を用いて、村落社会地理学的な記述を行っている³⁵⁾。すでに実証研究の次元においては、西洋人、日本人に加え、現地中国人の研究も参照される段階に至っていたのである。

西の宜昌と略同様の地政学的位置を占むるものに北の襄陽がある。支流漢水に於ける大型戒克、又は小蒸気船の遡航限界で昔から南北対立の際の必争の地となった所である。蒙古軍の南進に対して襄陽を堅守した宋軍は只に武漢のみならず宋の社稷を数年間維持する事ができた程である。蒋介石

34) 同上書、147-159頁。

35) 同上書、267-271頁。

は広西の李宗仁軍を基幹としてこの方面より武漢を伺はしめているが、我が襄東及び襄西作戦に於いて大打撃を蒙った。武漢と宜昌と襄陽とは湖北の軍地理的三鼎足である。そのうち襄陽と云う一足を尚敵手に委ねている事は武漢の背域の確保の為に非常な障害となっているものと考へねばならぬ。

長江中流域は当時、膠着した日中戦争の最前線であった。地域の歴史地理から地政学を論じる米倉の論理が襄陽の攻略の意義を明快に論じている。³⁶⁾ 中国本土については、華北・華中・華南・西南・西北という5地域に区分して、それぞれの戦局と結びつけた地政学的な展望が行われている。

6. 地誌を書くこと

近代日本において中国地誌がどのように書かれてきたのかについて、小論では岸田吟香『清国地誌』（明治十五年）、矢津昌永『高等地理 清国地誌』（明治三十八年）、米倉二郎『満洲・支那』（昭和十九年）の3書を取り上げて考えてきた。

幕末明治期には、東アジアに押し寄せる西洋の衝撃により海外への関心が高まる中で、翻訳地誌と呼ばれる西洋で出版された地誌の翻訳がひろく読まれていた。中国への関心もその例外ではないが、西洋書の中国記事は限定的なものであった。そこで、中国の伝統的地誌が伝える圧倒的な情報量を利用して、岸田の『清国地誌』は刊行されることとなった。当然ながらその記載は、中国の伝統的な地誌の体裁によるものとなった。

明治期における近代化は急速であり、様々な制度化が進められていった。アカデミー地理学の成立前夜にあたる明治末期に、地理教育界で活躍していた矢

36) 同上書、314頁。

津は中等教育用の地理教科書を多く出版した。『高等地理 清国地誌』はその一冊である。その内容は、翻訳地誌と中国的体裁の段階から大きく歩を進め、すでに現在に連続する実証的な地誌となっていた。

アカデミー地理学において訓練を受け、気鋭の地理学者であった米倉がまとめた『満洲・支那』は2つの特徴を持っていた。それは西洋や日本だけでなく現地中国の研究成果を取り入れ、自らも現地調査を行った、高い実証の水準を有した学術書としての側面と、総力戦への積極的関与としての地政学的な提言を多く含む時代性を表出する側面である。

こうして3書を比較すると、日本が世界に組み込まれてゆく近代にあって、海外地誌の一つとしての中国地誌に対する需要が常に存在したことがわかる。同時に3書には記述次元の相違と時代を反映した変化が確認される。小論を終えるにあたって、近代に書かれた中国地誌の不連続について整理しておくこととする。

まず中国的地誌記述の伝統からの脱却である。岸田の本は大清一統志など中国で書かれた伝統的地誌を主たる資料としたことから、地域別に沿革と山川を軸とした記載が行われていたが、矢津の本では系統地理的な記載と地域別の地誌が併載されるという現在の地誌がもつ基本的な体裁が採用されている。

つぎに地理学の専門家によって地誌が書かれるようになったことである。明治期の近代化の中で、科学としての地理学は次第にその制度を整えてゆくが、大学地理学講座と地理学会の成立を指標とするアカデミー地理学の形成前夜には、地理学の専門家が中国地誌を書くことが実現している。

専門家である地理学者が書くことによる結果として、実証的な地誌記述が充実していった。矢津は中国研究の専門家ではないが、多数の先行研究を活用して地誌を書いている。さらにアカデミー地理学で養成された米倉は、日本を軸として東アジアを歴史地理学的に考察した研究者であり、その実証の水準はきわめて高いものとなっていた。

そして時代の変化に応じた不連続である。とくに矢津と米倉の間にそれは明

確である。矢津は中国について客観的な記述を行うのに対して、米倉は主客を明確にして、すなわち日本の植民対象として満洲・支那を描いてゆく。米倉の書いた中国地誌は、鋭敏に総力戦という時代の要請に対応したものである。この変化に対する倫理的反省は必須であるが、それがその後も繰り返されてきた不連続と同一の性格を持つことにも目を向けるべきであろう。経済開発や社会主義革命、近くは新自由主義など様々な社会理論と地誌記述は結びついてきたのである。

子安宣邦は近代日本のオリエンタリズムを論じる中で、中国の他者化という概念を提示している。³⁷⁾ 日本は長く中国中心の世界観の中に置かれてきたが、近代の文明論において中国は周縁化されていった。日本にとって近代を実現するためには中国の他者化が必要であった。岸田から矢津へ、そして米倉へと、近代に書かれた中国地誌の変遷にも中国の他者化を認めることができる。初めは記載準拠の変化として、そして後には植民地主義を組み込んだ記述として、それは進んでいった。

本研究は平成19-21年度科学研究費基盤研究(c) (課題番号19520684) による成果の一部である。

37) 子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか』藤原書店、2003年、284頁。